

くしがた
櫛形無線中継所発掘調査報告書

たか ばたけ じょう せき
高 番 城 跡

1995

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

くしがた
櫛形無線中継所発掘調査報告書

たか ばたけ じょう せき
高 畑 城 跡

1995

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

櫛形無線中継所は、建設省の所管業務である治水・道路行政に関わる情報収集のための通信回線の中継所として、建設が計画されたものであります。

新潟県教育委員会は、平成6年に中継所建設に伴う高畠城跡の発掘調査を実施しました。本書はその成果をまとめた報告書であります。

高畠城跡は、中世の荘園として有名な奥山荘に所在する山城であります。奥山荘は現中条町を中心とする広大な荘園で、鎌倉御家人三浦和田氏が地頭として入部して以来、その一族が支配に当たった所であります。奥山荘には多くの山城が存在しておりますが、個々の城歴など不明な点が多く、その解明が待たれるところであります。

発掘調査は一部ではありますが、城にかかる造構として、堀切りが確認されております。高畠城跡の造構が確認されたことは、今後、櫛形山脈に所在する山城の研究に一石を投ずるものと思われます。

最後に、本調査に多大な御協力と御援助を賜りました加治川村・中条町教育委員会をはじめ建設省北陸地方建設局羽越工事事務所には厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

新潟県教育委員会

教育長 本間栄三郎

例　　言

- 1 本報告書は新潟県北蒲原郡中条町大字関沢字関沢山991番地の1ほかに所在する高畠城跡の発掘調査記録である。発掘調査は、^{やまと}横形無線中継所建設工事に伴い、新潟県が建設省北陸地方建設局（以下、北陸地建と略す）羽越工事事務所から受託して実施した。
- 2 発掘調査は平成6年度に新潟県教育委員会（以下、県教委と略す）が財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団と略す）に調査を委託したものである。
- 3 発掘調査は平成6年7月27日から10月14日まで実施し、平成6年度中に整理および報告書作成にかかる作業を行った。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管している。遺物の注記は略記号を「タカバタケ」として、出土地点・層位等を併記した。
- 5 本書の作成は埋文事業団調査課第二係職員があたり、寺崎裕助（同第二係長）の指導のもとに中澤毅（同主任調査員）が担当した。報告書の執筆は中澤と研修生嶋田仁志（加治川村教育委員会）が当たった。執筆分担は第II章・2が嶋田、それ以外が中澤である。編集作業は中澤が担当した。
- 6 本書は本文と巻末図版からなる。巻末図版は図面と写真で、主な遺構・遺物をおさめた。
- 7 引用文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 8 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示、御協力を得た。厚く御礼申し上げる。（敬称略、五十音順）

河内一男　品田高志　高橋亀司郎　本間信昭　水澤幸一　横山勝栄
加治川村教育委員会　新発田地域シルバー人材センター中条事務所　中条町
中条町教育委員会

目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の概要	6
1. 発掘調査の方法と経過	6
A. 調査の方法	6
B. 調査経過	7
C. 調査体制	8
2. 整理作業	8
第Ⅳ章 遺跡	9
1. 概観	9
2. 層序	9
3. 遺構各説	11
第Ⅴ章 出土遺物	13
第VI章 まとめ	14
《引用・参考文献》	15

図 版 目 次

図面

- 図版1 調査区全体平面図
- 図版2 造構実測図1 (SK1・SK2・SK3・ピット)
- 図版3 造構実測図2 (堀切り)
- 図版4 造構実測図3 (炭窯)
- 図版5 出土遺物実測図

写真

- 図版6 高烟城跡遠景／高烟城跡周辺空中写真
- 図版7 高烟城跡内現況／南区完掘／北区完掘
- 図版8 ピット 土層断面／ピット 完掘／SK1・SK2 土層断面／SK1・SK2 完掘／SK3 土層断面／SK3 完掘
- 図版9 堀切り土層断面
- 図版10 堀切り完掘／炭窯土層断面／焚口付近の箱形の落ち込み土層断面／焚口付近のピット土層断面／焚口付近のピット完掘／炭窯完掘
- 図版11 繩文土器・剥片石器・寛永通宝・鉢石

挿 図 目 次

第1図 周辺の道路分布図.....	2
第2図 奥山荘概念図.....	3
第3図 高畠跡繩張り図及び周辺の地形.....	4
第4図 表土除去作業風景（写真）.....	6
第5図 発掘作業風景（写真）.....	7
第6図 土層断面図・地山の起伏図.....	10

第一章 調査に至る経緯

北陸地建と県教委は毎年9月から10月に次年度の発掘調査要望と調査の実施について協議してきているところである。無線中継所の建設については、平成4年に中条町の国指定史跡奥山莊城館遺跡の白鳥城跡に建設したいとの要望があったが、国指定史跡の中には建てることができないと県教委は事前指導を行った。その後、北陸地建は3候補を選定したが、電波伝播上の問題をクリアーする中条町高畠地内にしほつて県教委と協議した。当初、北陸地建は平成5年度に発掘調査を要望したが、すでに5年度の事業は決定されていることや人的体制が整わないことから、県教委は実施できない旨を返答した。平成5年9月21日、県教委は工事に係わる高畠城跡については「やむをえず記録保存とする」ことで北陸地建に通知した。

平成5年10月25日に北陸地建と県教委及び埋文事業団との6年度事業についての協議があり、北陸地建から櫛形無線中継所建設に伴う遺跡発掘調査の要望が出された。建設地は周知の高畠城跡の一部で、面積は中条町と加治川村にまたがる640m²である。同年2月28日の北陸地建と県教委及び埋文事業団との協議では、切り土・盛り土部分も調査範囲に含め、面積が1,100m²に変更されることになり、調査は平成6年4月中旬頃から行うこととなった。平成6年3月22日には現地で北陸地建羽越工事事務所関係者の立ち合いのもとで協議を行ったが、保安林解除の許認可が5月下旬から6月上旬になるとのことであった。しかし保安林解除の許認可は遅れ、7月27日から調査を開始することとなった。

第二章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

高畠城跡のある中条町は新潟市の北東約40kmに位置し、面積約85.7km²、人口約29,000人である。北東は岩船郡荒川町、東は黒川村、南東は新発田市、南は加治川村及び紫雲寺町に接する。中央部を北西方向に胎内川が流れ、同川流域には扇状地が形成されている。西から北西は日本海に面していて、その海岸線は單調である。それに沿った形で新潟砂丘が見られる。胎内川の開削以前までは、この砂丘間に川が運られるために、現在の平野部の大部分は湿地であったと考えられる。また、南西部には江戸時代に干拓されるまで紫雲寺溝（塩津溝）が存在していた。この溝端は、地図上にも明瞭にその後を残している（第1図）。湿地の北東部には櫛形山脈が北東から南へ連なっている。

今回、発掘調査の行われた高畠城跡は、櫛形山脈の中腹で、北蒲原郡中条町大字開沢字開沢山991番地の1ほかに所在する。櫛形山の頂上（526m）付近から西下方に派生する尾根上に立地しており、標高は約245~265mを測る。北側には大沢川、南側には小国谷沢川の両溪谷が流れる。本城跡の北西方向の端か

らは、前述した船内川の扇状地や紫雲寺洞を埋め立ててできた平野部、砂丘列、海岸線などが一望できる。このような好条件を備えている本城の近辺にも中世の山城が点在し、特に櫛形山脈の北端には鎌倉時代の古戦場で『吾妻鏡』にも記されている鳥坂城が存在する。

前述した大沢川が流れ出る山麓の平坦部には、10数基の配石遺構が検出された大沢遺跡などの绳文時代の遺跡や古代・中世の集落跡、館跡などが多く分布している。

2. 歴史的環境

高畠城跡は、現在の中条町・黒川村を中心に関川村・荒川町・加治川村・紫雲寺町の一部を含めた広大な莊園、奥山莊に位置する。

奥山莊の立莊は、文献の初見では『吾妻鏡』「文治二年三月十二日条」年貢未納莊園の注進状に「殿下御領 奥山莊」とあり、11世紀半ばにさかのぼると考えられているが、建仁元(1201)年越後平氏城安盛の滅亡に伴って、鎌倉御家人三浦和田(高井)氏が地頭として入部してきた時点をもって、奥山莊の中世が始まったといえる。

奥山莊の地頭職は「木曾(義仲)殿追討之賞」(『新潟県史』資料編中世2-1264号)として鎌倉幕府侍所初代別当和田義盛の弟和田義茂に与えられたもので、義茂からその弟の宗美、宗実の女津村尼を経て津村尼の子高井時茂(道円)に譲られた。13世紀後半には莊域を三つに分割し、現在の塙谷・塙沢・下江端

(いすれも黒川村)・切田(荒川町)のあたりを
北条・関沢・長橋・柴橋・塙津あたりを南条、そ
の間の飯角・赤川・築地・村松浜・鞍岡(黒川村)
あたりを中条とし、北条と中条では現船内川、中
条と南条では飯角の傍流から大山祇神社(柴橋)
を結び西に延長した線が、その境となる。後にそ
れぞれ北条の領主は黒川氏、南条は関沢氏、中条
は中条氏を名乗った。

高畠城跡の所在する南条には中世の城跡として市ノ沢城跡・倉田城跡・高つむり城跡などがある。高つむり城跡は烽台とみられ【横山ほか1987】、また倉田城跡は標高65mの小丘の上にある城であるが、市ノ沢城跡は、険しい尾根の頂部にあり縄張りや施工の規模が小さい【横山ほか1987】という点で高畠城跡と共通の要素を持つ。また同じ尾根線上にある小国谷城跡は、旧道が小国谷の北の尾根の鞍部を越えて閑沢や長橋へ通じており閑沢との関連を感じさせる。その麓には閑沢館跡・長橋



第2図 奥山莊概念図

2. 歷史的環境



先鋒調查區域

第3図 高畠城跡網張図及び周辺の地形（柳山・高橋ほか1987）加筆・修正

館跡など閔沢氏やその後裔である長橋氏に関連のあると思われる城跡や館の推定地があり、高畠城跡が閔沢氏、長橋氏のいずれかに関係していることが推測される。しかし、その後閔沢氏は中条氏・黒川氏のようないくつかの国人領主に成長できず、応永の大乱（1423年－1427年）の過程で閔沢頼元が守護上杉氏の「御内」（家臣）となり、やがてその家系も古文書も史家の眼前から消え去る。

閔沢氏に変わって南条をおさめた中条氏は、黒川氏と共に親類・家風を中心とした新しい主従関係を成立させ、国人領主として領内支配を実現していくのである。

第III章 調査の概要

1. 発掘調査の方法と経過

A. 調査方法

グリッド設定については、高畠城跡近辺の加治川村小国谷地内の三角点から座標を起こし、長軸は真北方向に一致させて10mごとにアルファベットで示し、短軸には真東方向へ10mごとにアラビア数字で示した。なお、南北隔の座標値は、X(224, 540)、Y(80, 540)である(図版1)。10×10mに区画された範囲を1グリッドとし、調査区域のグリッドの杭の打設及びレベル値の測量は業者委託とした。

調査は、梅形無線中継所建設が急を要する工事のため調査区域に隣接する擁壁工事が同時進行して行われたことや排土捨て場が狭いことなどから、調査区域のはば中央を境に北区と南区に分け、排土捨て場に近い南区から調査を開始した(第5図・図版1)。調査開始の時期が猛暑と重なるなどして、作業員が不足し、7月下旬から8月中旬までは10人以下の作業が続いた。排土の運び出しは、調査区の大半が斜面であることや作業員の人数が少ないと、狭い林道が物資の運搬のための唯一の交通路であることなどにより、ベルトコンベアを使わずにクローラークランプや一輪車を使用した。その後、作業の能率化を重視して作業員が20人前後になった八月下旬から安全面等に十分配慮した上でベルトコンベアを導入した。遺物の出土は少なく、そのほとんどは表面採集であった。遺構は地山まで掘り下げる後、精査し、遺構発掘及び実測を行った。



第4図 表土除去作業風景(後方は梅形山脈の最高峰へ通じる峰)

B. 調査経過

調査期間 平成6年7月27日～10月14日

- ① 調査区のほぼ中央に土層観察のため幅約1mの南北ベルト1本と東西ベルト2本（第5図）を残し、8月1日からバックホーによる表土除去を行った。その後、グリッド杭を打設した。
- ② 南区の調査は人力を中心に8月8日から行い、土坑2基とピット1基を検出した。その他に地山の礫岩や風倒木痕の存在を確認した。遺物は縄文時代の土器4点で、2点は表面採集、1点は木の根の近くから、もう1点は風倒木痕内からの出土のため、グリッドを確認して取り上げた。
- ③ 南区の調査を終了した後、9月13日から早速バックホーで北区の表土除去を行ったが、南区に比べて斜面が急であるため、ベルトを現況のままにして掘り下げることができず、残したベルトの直上に除去した土を盛ることは避けられなかった。表土除去と並行して、バックホーで南北ベルトに沿って約1.5mの幅でトレーナーを入れ、地山の起伏の様子を観察した。その後、南区同様にグリッド杭の打設を委託した。調査の終了した南区は排土捨て場及び作業員休憩所として使用した。
- ④ 北区の調査は9月19日から本格的に始め、調査区の北端の急斜面から南東方向に下がっていく方法で作業を進めた。急な斜面の掘り下げは作業員が高齢なこともあり、地山を表出するまでの作業には時間を要した。その後、調査以前から確認されていた溝状のくぼみについて、南北ベルトの他に2本のベルトを設定し掘り下げたところ、砾石2点、石器1点（共に表土から出土）、銭貨1枚が出土したほか、山城に関わると考えられる堀切りが検出された。さらに、その南側に地山の礫岩の存在が確認された。東側斜面には炭窯1基と土坑1基が検出されたが、斜面がかなり急で、明確なプランの検出ができず、トレーナーを入れて覆土の様子を観察したために炭窯の中央を削る結果となった。この作業と並行して、南地区との境界までの斜面の掘り下げ及び造構精査を行ったが、遺物及び造構は皆無であった。
- ⑤ 調査区の地形図作成のためのコンターラインの測量は時間がなかったので、調査区のグリッドを細分した1×1mの小グリッドの各交点のレベルを測って記録に残し、整理作業時に作成することにした。10月14日に全調査を完了した。



第5図 発掘作業風景（左・南区、右・北区）

C. 調査体制

調査主体	新潟県教育委員会	(教育長 本間栄三郎)
調 査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団	(理事長 本間栄三郎)
管 理	藍原 直木	(事務局長)
	渡辺 精吉	(総務課長)
	茂田井信彦	(調査課長)
庶 務	泉田 誠	(総務課主事)
指 導	寺崎 裕助	(調査課埋蔵文化財第2係長)
調査担当	中澤 節	(" 主任調査員)
研 修 生	嶋田 仁志	(加治川村教育委員会)

2. 整 理 作 業

高畠城跡の発掘調査終了後、埋文事業団本部において本報告書に関わる整理を行った。
実測・写真撮影・図版作成等の主要な作業は中澤を中心に嶋田がこれにあたったが、この間に埋文事業団職員から多くの協力を得た。

第IV章 遺 跡

1. 概 観

高畠城跡は、柳形山脈の最高所「高つむり城」の近くから西方に派生した尾根を降りた頂部とその西北方向に階段状に降りる部分に主郭と考えられるところが10か所余設けられている。また、この周辺に延びる尾根を堀切りで所々遮断しており、現林道部分はそれらの堀切りの中の1つを削平して作ったものと考えられる〔横山・高橋ほか1987〕(第3図)。今回の発掘調査は、高畠城跡の南西部にあたると考えられるわずかな部分の調査であり(第3図)、山城に関連すると推測される遺構は、検出層位や形態から堀切りだけで、主郭あるいはそれに準ずるような平坦部は検出されなかった。この他、土坑やピット、炭窯が検出されたが、遺構内の出土遺物が皆無であることなどから、構築時期を推定することはできなかった。

遺物は南区と北区の境界及び堀切り付近を中心に绳文土器片や砥石、銭貨、石器が出土したが、それらの大半は表面採集及び、表土からの出土であった。

2. 層 序

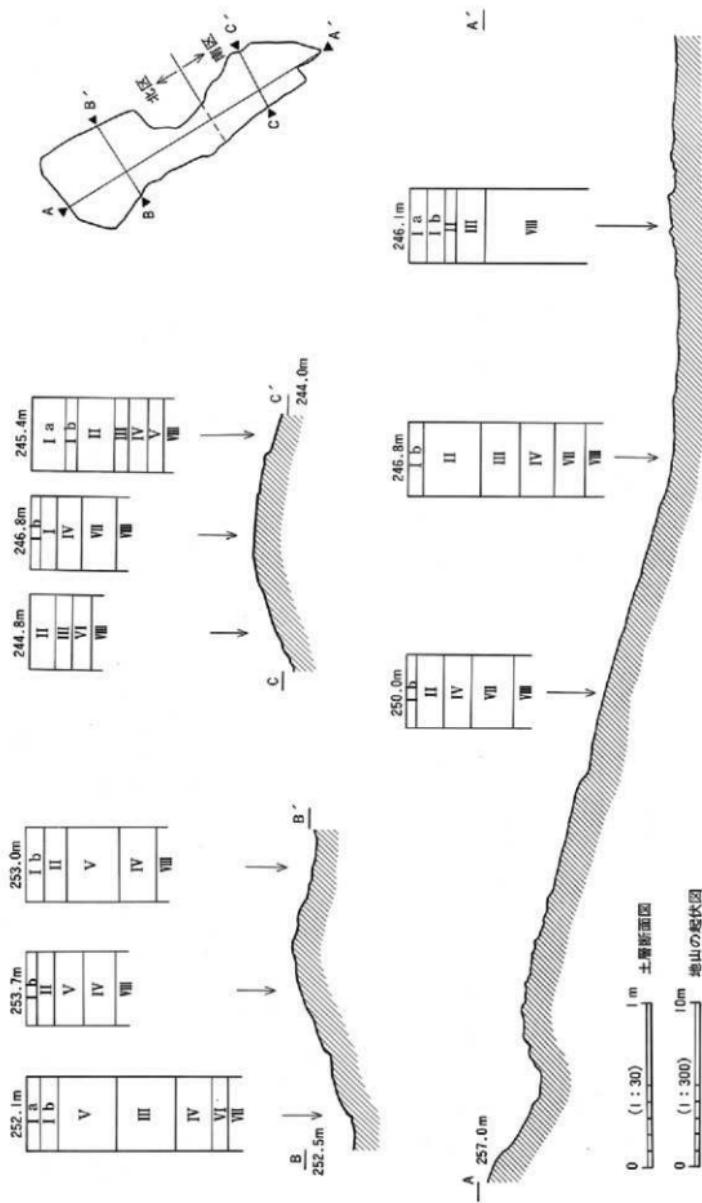
南区、北区とも遺物包含層はなく、礫岩を含んだ黄褐色土(VII層)や風化の進んだ礫岩層(VIII層)が最下層(地山)をなしている。この礫岩層は約1億年前に地下深くでマグマがゆっくり冷やされてできた花崗岩からなっていて、高畠城跡の位置する柳形山脈の大半を占めている〔河内1995〕。北区ではこの地山の黄褐色土が上層の明褐色土(VI層)や褐色土(IV層)を挟むような形で堆積しているが、上層の黄褐色土(V層)は最下層のそれに比べてしまがいなく、粘性も弱いので、1つの層として扱うこととした(第5図B-B'の柱状図)。斜面上部の地山が風雨などにより崩壊し、流れ落ちて堆積したと考えられる。馬の背状の斜面が大半を占めている北区の地山までの堆積は南区に比べてうすい。東西の斜面の下部や斜面が緩やかになる部分の堆積は多くなってくるが、馬の背状斜面の頂部や南区・北区にそれぞれ確認された風化の進んだ礫岩層上の堆積は少ない。

本城跡における基本層序は以下のとおりである。

I a層：黒色土(表土)。枯れた木の葉、木の枝などを含む乾燥した土。

I b層：黒色土(表土)。しまりが少しあり、粘性がやや強い。径1mm以下の砂粒を少し含む。南区と北区の境界付近から南区の礫岩層の高まりの部分にかけての比較的なだらかな所で、固くしまっている。

II 層：茶褐色土。しまりが少しあり、粘性がやや強い。径1~3mmの砂粒や砂礫を少し含む。南区東斜面に炭化物を少し含む。



第6図 土壌断面図・地山の起伏図

- III 層：黒褐色土。しまりがよく、粘性がやや強い。径3～5mmの砂礫を含む。南区東斜面に炭化物を少し含む。
- IV 層：褐色土。しまりがなく、粘性がやや強い。径5mm～1cmの砂礫を含む。
- V 層：黄褐色土。しまりがなく、粘性が弱い。径1cm前後の砂礫を含む。
- VI 層：明褐色土。しまりが少しあり、粘性がやや弱い。径1cm前後の砂礫を含む。
- VII 層：黄褐色土（地山）。しまりがなく、粘りが弱い。南区、北区ともに風化した礫岩片を多く含むところがある。
- VIII 層：風化した礫岩。礫岩の隙間にVII層を含む。

3. 遺構各説

堀切り（図版3・9）

調査区の北西の端に位置し、急斜面と南東に延びる尾根の根元を直角に切断する堀切りとそれに伴う空堀[千田1993]があり、さらに礫岩の高まりが続いている。

堀切りは堀の底面より30°～35°の傾斜で、土の堆積状況から礫岩層（VII層）を掘削することにより、傾斜を大きくしたと考えられる。この堀切りの急斜面は調査区外にも広がっていると思われるが、今回は全体の約3分の2の調査を行った。空堀は長さ約24m、幅約3m、深さ約80cmの断面がU字形を呈した「箱堀」[千田1993]と呼ばれているもので、風化した礫岩層（VII層）を振り込んでいる。底面は幅約1m以上の平坦部をもち、堀は礫岩の高まりの側の底面より40°の傾斜で立ち上がる。底面と堀切りを登り切った平坦部との比高差は約8mで、同じく底面と礫岩の高まりとの比高差は約1.5mを測る。礫岩の高まりは南西の緩斜面方向へ舌状に約10m延びている。

以上のような配置や地山の状況から、この堀切りは急斜面を登り切った平坦部と礫岩の高まりを直線で結ぶ斜面を掘削して構築されたものと考えられる。

土坑（SK1）・土坑（SK2）（図版2・8）

SK1がSK2を切る形で南区のほぼ中央の平坦部に検出された。標高は約246.0mを測る。両土坑とも、土層観察用の深堀トレンドで約5分の1を削る結果となつたため、正確な平面プランは確認できなかつたが、推定輪から考察することにした。SK1については長軸約1m、短軸約80cm、深さ約25cmで覆土はしまりがあまりない褐色系の3層からなる。2層以外は2～5cmの砂礫を含む。SK2は長軸約1.5m、短軸約1.2m、深さ約3.5mで、覆土は褐色系の3層からなり、1層以外はしまりがあまりなく、全体に1～4cmの砂礫を含む。土坑内出土遺物が認められなかつたため、構築時期は不明である。

土坑（SK3）（図版2・8）

北区の北東斜面に位置し、標高は約252.0mを測る。長軸約4m、短軸約3.1m、深さ約90cmで隅丸方形を呈する。確認面が赤味を帯びた褐色土であったために正確な平面プランがつかめなかつた。

覆土は、全般的にしまりがよい褐色系の10層からなり、5層以外は砂礫あるいは砂粒を含む。2層と7層には炭化物を少し含む。

ピット (図版 2・8)

南区の南東の緩斜面上で標高約245.5mを測る。

長軸は約70cm、短軸約40cm、深さ約20cmを測る楕円形をしている。覆土は黒色土と褐色系の3層からなり、全体にしまりがあまりない。2、3層には径1mm以下の砂粒を含む。

炭窯 (図版 4・10)

北区の北東斜面に土坑と掘切りに挟まれるような位置に検出された。標高は約252.8mを測る。長軸は約3.7m、短軸は約2m、深さは1.4mで、覆土は褐色系の9層からなる。3層以外はしまりがあまりなく、粘性も弱い。炭化物は2層と5層に含まれ、特に5層には径5cm前後の炭化物を多く含んでおり、炭化物の下には焼土の層も検出された。形態等から平窯の流れをくんだ近世以降のものと考えられるが、造構内出土遺物が検出できなかつたので明確な構築時期を推定できなかつた。

この炭窯の焚口と考えられる付近には断面が箱形の落ち込みとピットが検出された。落ち込みは長軸が約60cm、短軸が約40cm、深さ約30cm、ピットは長軸約80cm、短軸約50cm、深さが約65cmを測る。覆土は落ち込み及びピットとも炭窯の3層以下が堆積している。

第V章 出 土 遺 物

遺物は、総数で8点と少なく、大半が表面採集あるいは表土からの出土である。また、山城との関係を積極的に示すような遺物は出土しなかった。

縄文土器（図版5・11）

1と3は南区の表面採集、2はD-4グリッドの風倒木痕の中から、4はD-4グリッドの木の根の脇から、それぞれ出土した。

1は、三角刻印の入った蓮華文を施した縄文時代中期初頭の新保式土器と考えられる。口縁の内面には炭化物が付着している。

2、3、4については、外面は格状体の压痕文が施され、内面は条痕で調整されている。3点とも胴部破片で同一個体と考えられるが、接合はできなかった。縄文はLRで、焼成は良好、繊維が少し含まれる。色調はぶい橙色である。縄文時代早期後葉のものと考えられる。

錢貨（図版5・11）

北区F-1グリッドで、空堀の埋土5層（黒色土）と6層（明褐色土）の境目から1枚だけ出土した。寶の字の「貝」は古寛永が「貝」と読み取れるに対し「貝」と読み取れるため、寛文8（1668）年から明治2（1869）年に鋳造されたいわゆる新寛永である。

石器（図版5・11）

5はG-2グリッドで空堀の表土から出土した縁辺に不連続な小型剝離のある剝片石器である。石材は頁岩で重量は96gである。前述した縄文時代の土器片が調査区域内で出土していることから、同時代の石器と考えたほうがよいようである。

礫石（図版5・11）

7と8の2点とも壌切りの表土から出土した。7は直方体を呈し、正・側面に作業面をもつ。石材は凝灰岩で重量は231gである。下面には素材切り出し時の工具痕を残す。8は正・裏・側面に作業面をもち、直方体を呈する。上面には素材切り出し時の工具痕を残す。石材は凝灰岩で重量は309gである。2点とも時期を推定できない。

第VI章　まとめ

今回の発掘調査は高烟城跡と考えられていた山城の一部分の調査であった。また、検出遺構も堀切り以外の土坑やピット、炭窯等は山城との関わりは薄いと考えられる。縄文土器や石器、寛永通宝、砥石などの出土遺物においても同様である。このように、今回の調査部分は山城の中心部分との関わりは大きくなないと考えられ、高烟城の全体像を把握するまでには至らなかったが、以下、些少ながら今回の調査から推測できることを述べてみたい。

堀切りは山城では一番基本の堀であり、南北朝期に本格的な山城が出現した時から使われており[千田ほか1993]、今回の発掘調査で検出された堀切りを有する高烟城も南北朝期以降に構築されたものと考えられる。本山城の性格については、これまでの発掘調査やその後に行なった縄張り調査¹⁾から推測すると、かねてから論じられてきた軍事施設であるという見方[村田ほか1985]に加え、集落と密接な関係にある施設という見方[横山1989]も考える必要があろう。前者においては、前述した高烟城の規模から推測して、「出城」・「付城」等として主要城視する大型城の付属城とする見方にはまるであろう。また「第II章　2　歴史的環境」でも若干ふれたように、当地の麓に中世以降存在した閑沢氏や長編氏、そしてその後両氏の領内を支配した中条氏との関わりが有力視されていることから、「小領主の居館近く」[村田ほか1985]の出城という性格にもまるではあるのだが、それらの勢力の館跡については推定の域を出ていないばかりか文献資料も皆無であり、この見解にのみ依拠することはできない。後者においては、聞き込み調査によると麓に最も近い集落から高烟城跡まで近道を通っても山道1.5km程度の距離があるということことで、この山城が「集落から比較的安易な行動で到達可能な範囲内にあり」[横山1989]というカテゴリーに含まれるか否か微妙なところであるが、高烟城跡の縄張りの大半の区域は「集落及びその周囲地域から容易に仰視でき」[横山1989]る点や「村落民が戦いに際して避難する避難所としての『山小屋』」[千田ほか1993]の機能も含んで山城をとらえた場合、今回検出された堀切りについても村落民によって構築された防御施設の一つとして考えられなくもない。前述したように、この高烟城跡の近辺には小規模の山城が点在し、その近辺にもやはり中世からの集落が点在していること[高橋ほか1982]から考えて、集落と密接な関係のある山城という見解に十分考慮していく必要がある。

いずれにしても今回の発掘調査からは以上のような見解にとどまるのみであるが、今後、高烟城跡の中心部分の調査は勿論のこと、近辺の中世の遺跡の調査が進む中で、この山城の性格も明らかになることを期待したい。

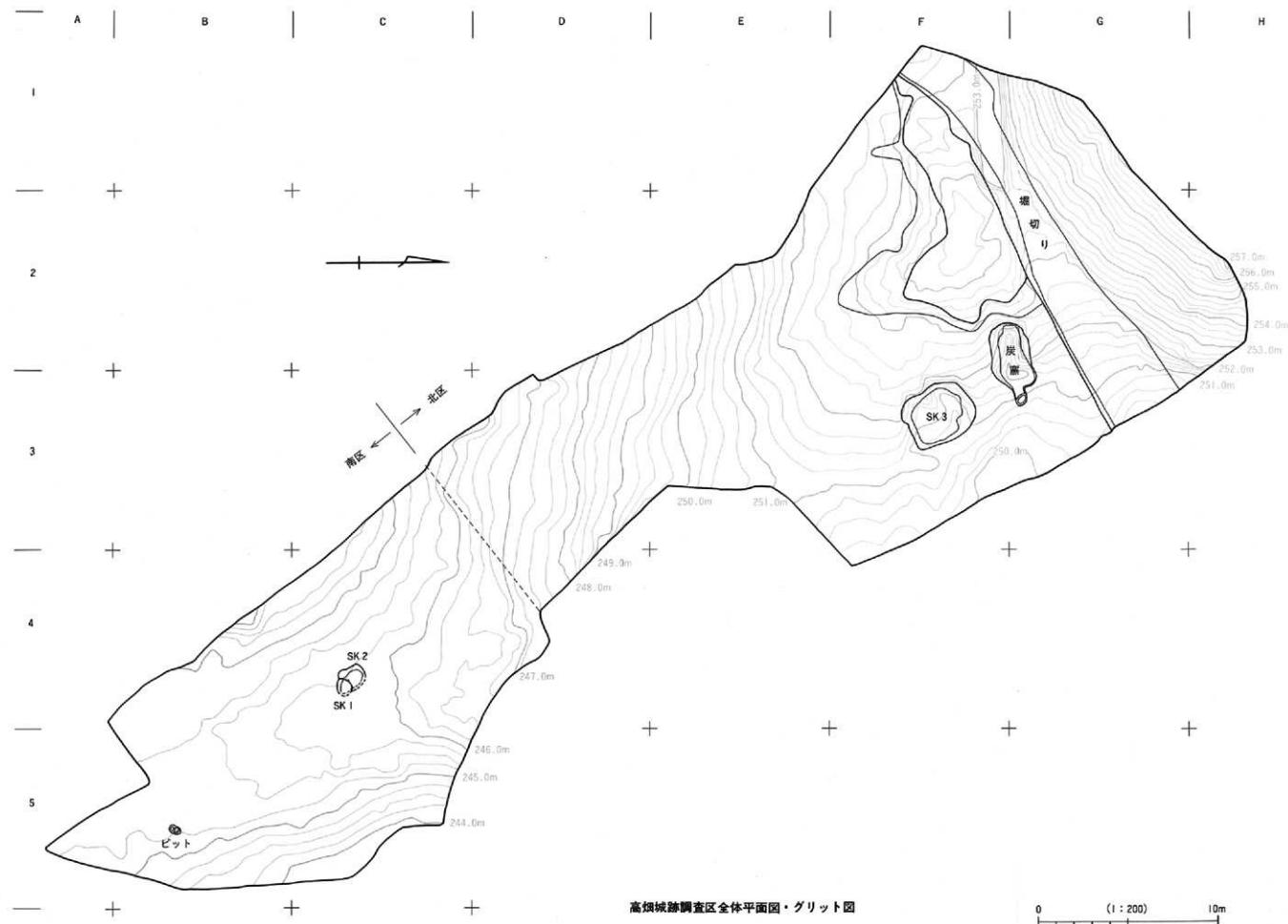
なお、標高約250mの細尾根上で縄文土器が出土することは予想外のことであり、他にもこのような例は少なく、今後縄文時代早期後葉から中期初頭の縄文人の行動や遺跡立地を考える上で、貴重な資料になるものと思われる。

1) 発掘調査後の平成7年1月9日に行った縄張り調査では第3団のような広い範囲の平坦部を見付けることはできなかつた。第3団で引用した縄張り図[横山・高橋ほか1987]が作成されてから約8年の歳月がたっていることや今回の縄張り調査がわずかとはいえ積雪のある中で行ったことなどを考え合わせた場合、今後のより正確な調査を待たなければならないと思われる。

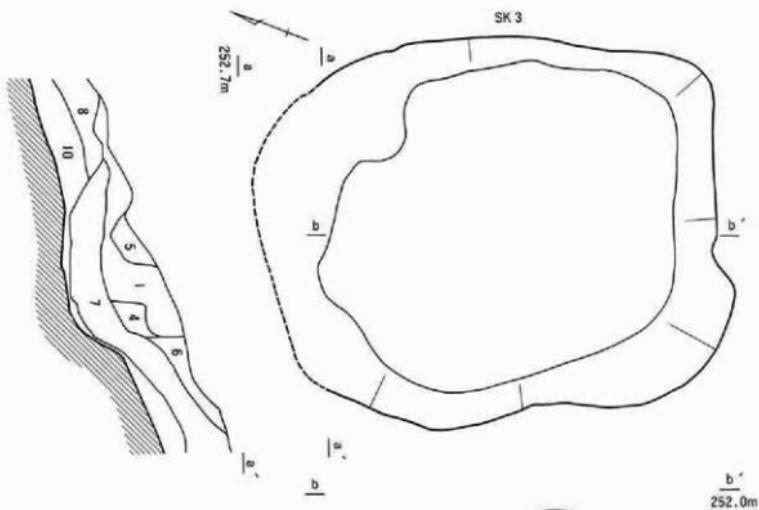
引用・参考文献

- 天野和孝・河内一男・鶴井幸彦 1995 「新潟県 地学のガイド(下)」 コロナ社
- 石井進・萩原三雄 1991 「中世の城と考古学」 新人物往来社
- 井上親夫 1967 「奥山莊の復元的研究—建治分与をめぐって—」『日本社会経済史 古代中世編』 吉川弘文館
- 小田由美子ほか1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第63集 関川関跡」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 亀井 功ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第61集 萩野遺跡・官林遺跡」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 児玉幸多・坪井清足 1980 「日本城郭大系 第7巻 新潟・富山・石川」 新人物往来社
- 小村式・田中圭一・中村辛一・山崎久雄 1989 「角川日本地名大辞典 15 新潟県」 角川書店
- 坂井秀弥ほか 1989 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集 山三賀戸遺跡」 新潟県教育委員会
- 沢田 敦ほか 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第64集 上ノ平遺跡A地点」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 千田嘉博・小島道裕・前川要 1993 「城館調査ハンドブック」 新人物往来社
- 高橋亀司郎ほか1982 「中条町史」資料編第一巻 (考古・古代・中世) 中条町史編さん委員会
- 寺崎裕助ほか 1983 「新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第34集 片刈城跡」 新潟県教育委員会
- 中野豈任 1993 「荒川保・奥山莊」『講座日本莊園史 6 北陸地方の莊園・近畿地方の莊園Ⅰ』 吉川弘文館
- 水澤幸一 1994 「中条町埋蔵文化財調査報告第4集 高伝坂遺跡・中ノ沢遺跡」 中条町教育委員会
- 水澤幸一 1994 「中条町埋蔵文化財調査報告第6集 奥山莊城館遺跡調査報告第2集 江上館跡Ⅱ」 中条町教育委員会
- 宮榮二・山田英雄 1986 「日本歴史地名大系 15 新潟県の地名」 平凡社
- 村田修三 1985 「戦国時代の城郭」「歴史公論」 115号 雄山閣
- 横山勝栄・高橋亀司郎ほか 1987 「高畠城跡」「新潟県中世城館等分布調査報告書」 新潟県教育委員会
- 横山勝栄 1989 「新潟県東蒲原郡の中世城館資料について—山城の位置を考える」『新潟県考古学試話会会報』 第4号 新潟県考古学試話会

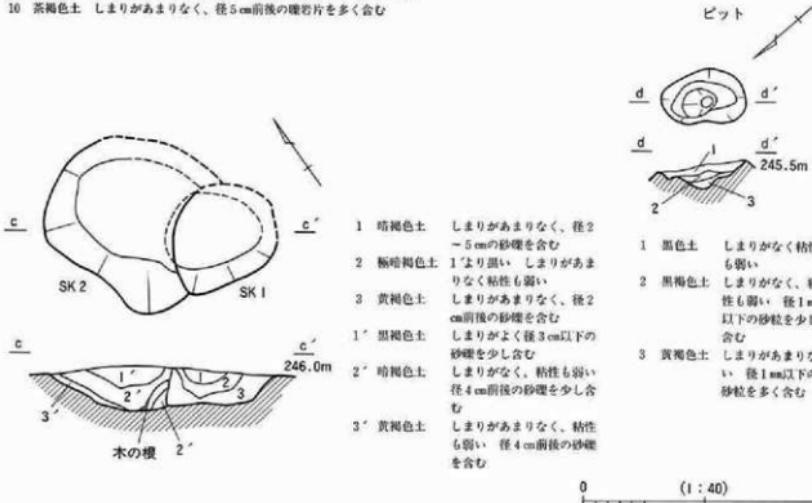
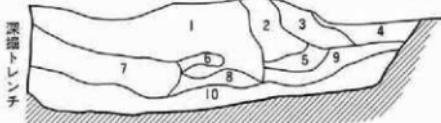
図 版

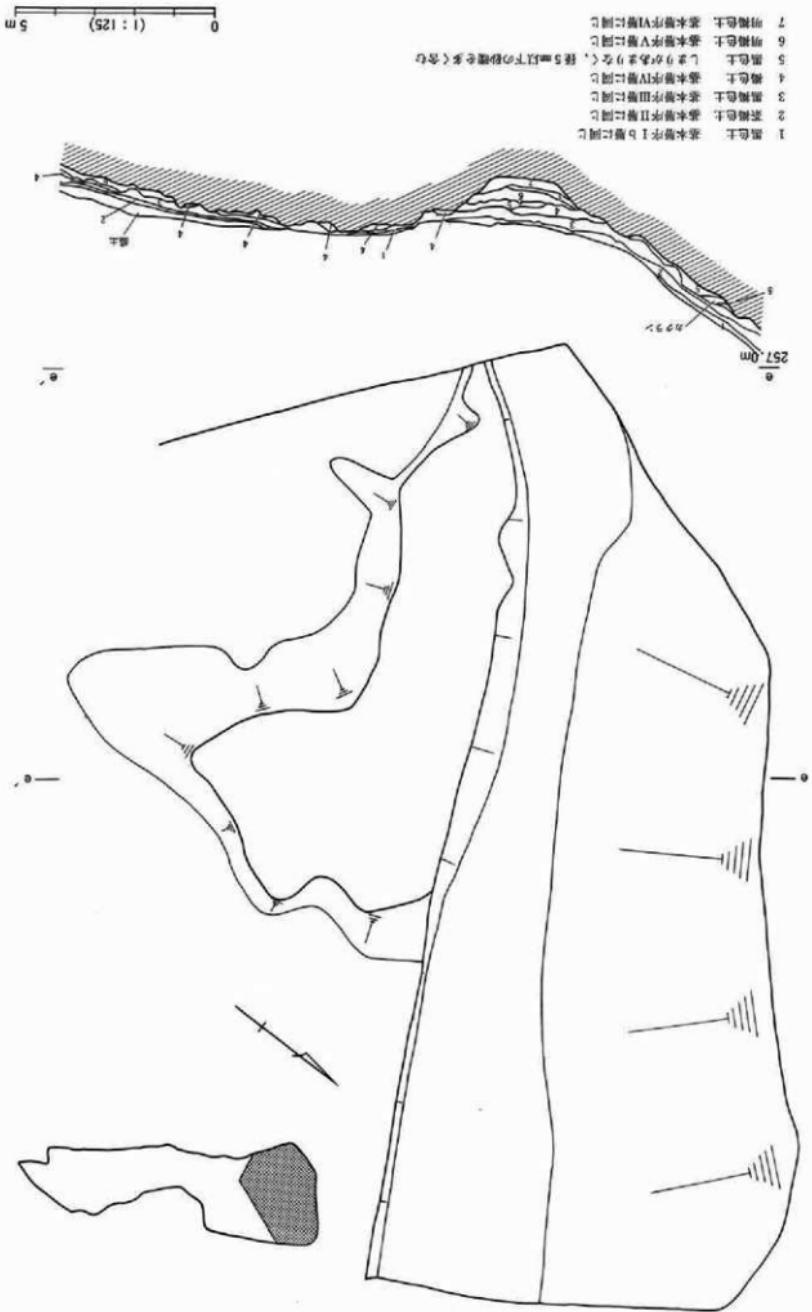


高畠城跡調査区全体平面図・グリッド図

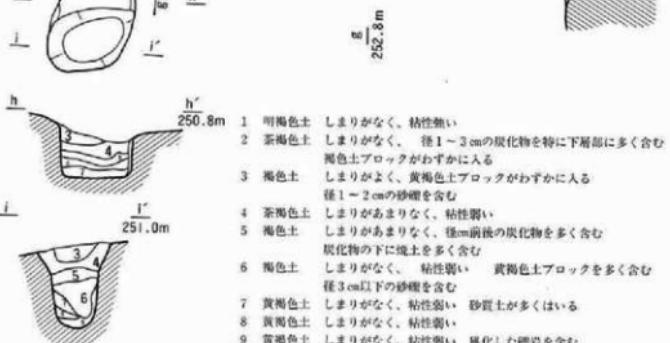
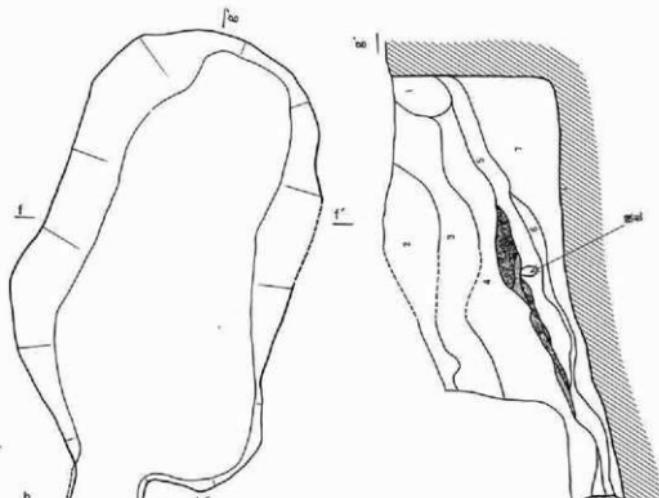
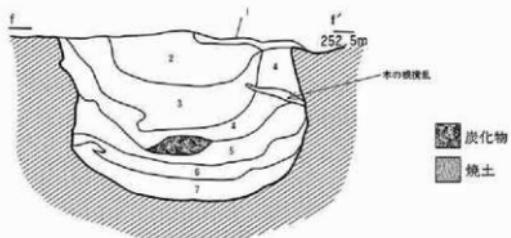


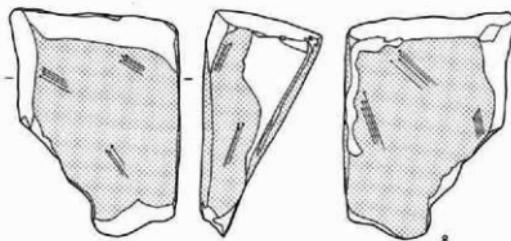
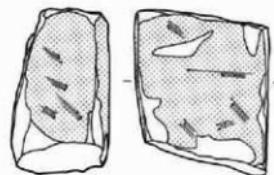
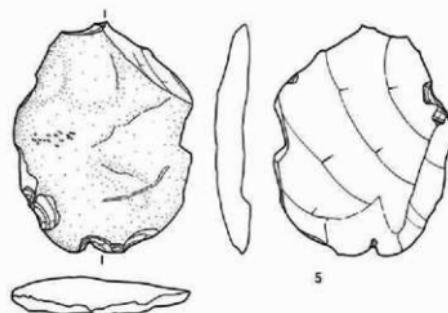
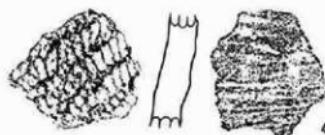
- 1 茶褐色土 粘性弱 径2~4cmの風化した礫岩片を多く含む
- 2 茶褐色土 しまりがよい 径1cm前後の炭化物を少し含む 径2mm以下の砂粒を含む
- 3 棕色土 しまりがよい 径1cm前後の炭化物を少し含む 径2mm以下の砂粒を含む
- 4 茶褐色土 しまりがよい 粘性弱い 径2~4cmの風化した礫岩片を含む
- 5 棕色土 しまりがよい
- 6 黒褐色土 しまりがありなく、径5cm前後の礫岩片を多く含む
- 7 墓褐色土 しまりがよい 径2mm以下の炭化物を少し含む 径2mm以下の礫岩片を含む
- 8 棕色土 しまりがありなく、径3~5cmの風化した礫岩片が大半を占める
- 9 茶褐色土 しまりがよく、粘性も強い 径4cm前後の礫岩片を多く含む
- 10 茶褐色土 しまりがありなく、径5cm前後の礫岩片を多く含む





遺傳實驗圖2 (細胞)





0 1 : 2 5 cm (5・7・8)

0 2 : 3 5 cm (1～4)

0 1 : 1 (6) 5 cm



高佃城跡周辺空中写真(1:800)

資料提供・中条町



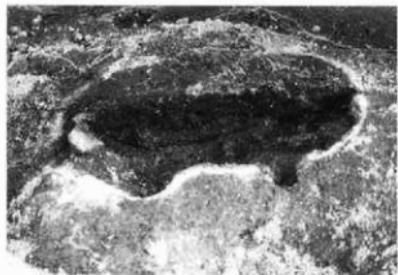
高畠城跡内現況
(北区の北側部
分ー南東から)



南区先端
(南東から)



北区先端
(北西から)



ピット土層断面（北西から）



ピット完掘（北西から）



SK 1 (右) SK 2 (左) 土層断面（南西から）



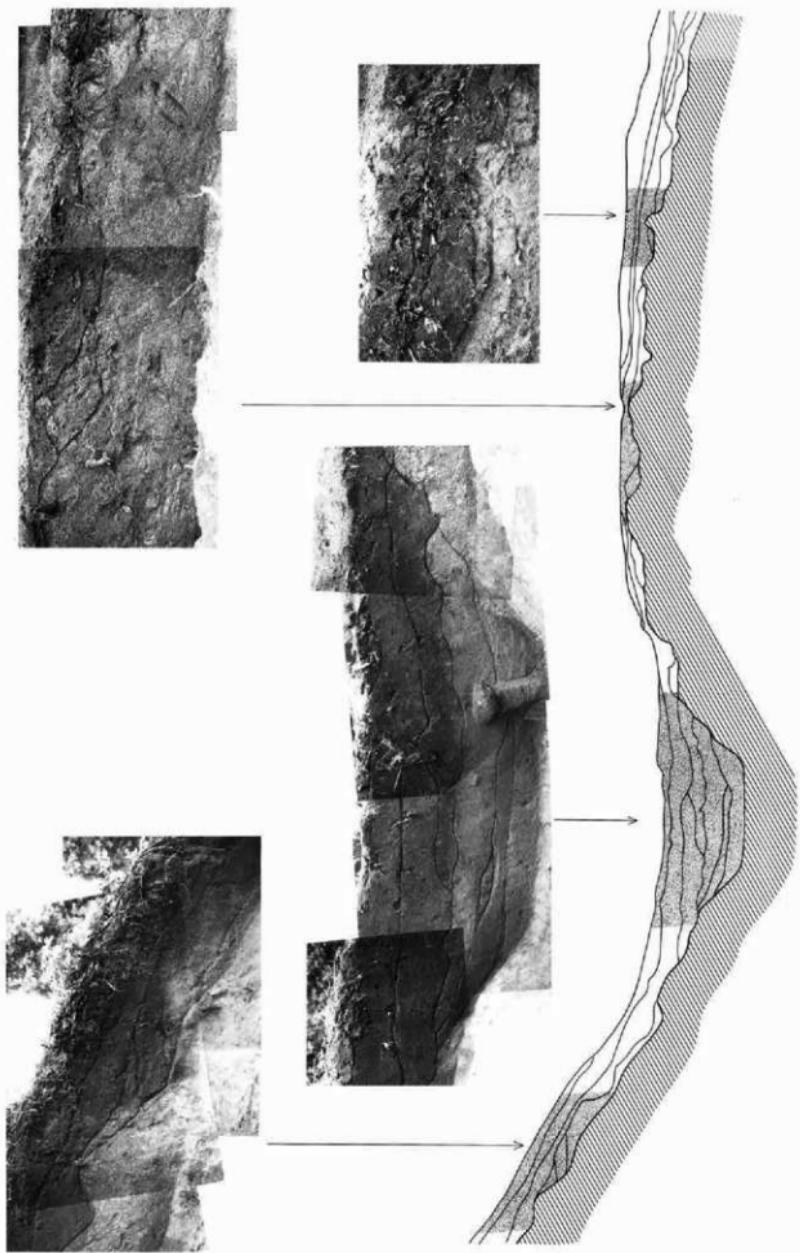
SK 1 (上) SK 2 (下) 完掘（南東から）



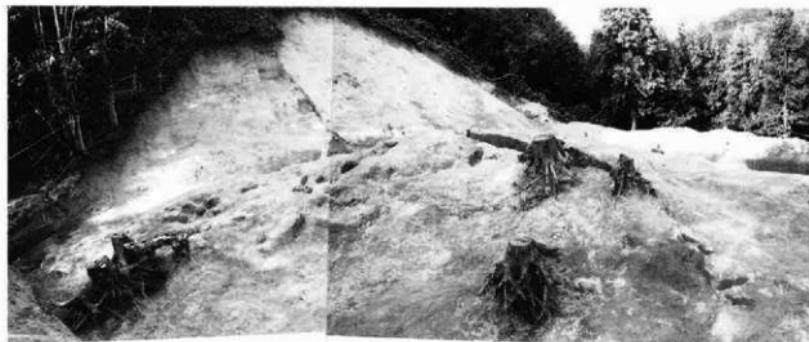
SK 3 完掘（北東から）



SK 3 土層断面（北西から）



福切り土層断面(南西7.5'.)



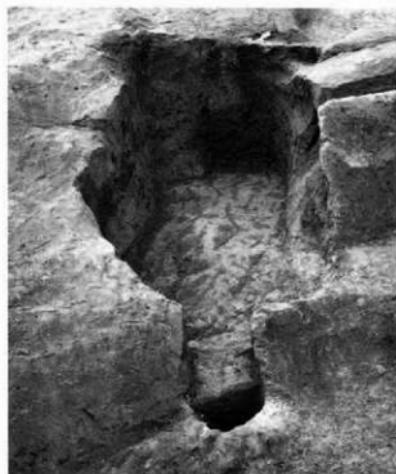
焼切り完端（南から）



炭窯土層断面（東から）



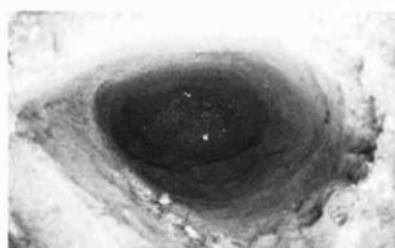
焚口付近の箱形の落ち込み土層断面（東から）



炭窯完端（東から）



焚口付近のピット土層断面（東から）



焚口付近のピット断面（北東から）

繩文土器
(1~4)
(2:3)



1



2



3



4

剥片石器
(5)
(1:2)



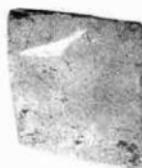
5



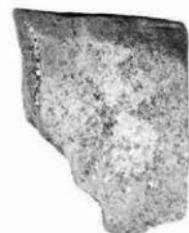
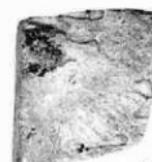
寛永通宝
(6)
(1:1)
砥石
(7, 8)
(1:2)



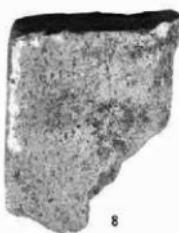
6



7



8



報告書抄録

書名	高烟城跡							
副書名	樹形無線中継所発掘調査報告書							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編著者名	中澤敏							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒951 新潟市一番堀通5923-46 TEL025-223-5642							
発行年月日	1995年3月31日							
所取遺跡	所在地	コート		北緯	東経	調査機関	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高烟城跡	新潟県北蒲原郡 中条町大字開沢 字開沢山1991-1ほか	15-310	21	38度 01分 13秒	139度 25分 01秒	19940727～ 19941014	1,100m ²	樹形無線中継所建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
高烟城跡	城館	中世	櫛切り 炭窯1基 土坑3基	砥石・錢貨(寛永通宝) 绳文土器・石器				

新潟県埋蔵文化財調査報告書第67集

樹形無線中継所発掘調査報告書

高烟城跡

平成7年3月28日印刷
平成7年3月31日発行

発行 新潟県教育委員会

〒950 新潟市新光町4-1

電話 025(285)5511

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒951 新潟市一番堀通5923-46

電話 025(223)5642

FAX 025(228)1762

編集 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

印刷 桶北部

本社 新潟市西口1番8号 〒950

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第67集 『高畠城跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄錄	北緯	38度01分03秒	38度01分14秒
抄錄	東経	139度25分01秒	139度24分49秒